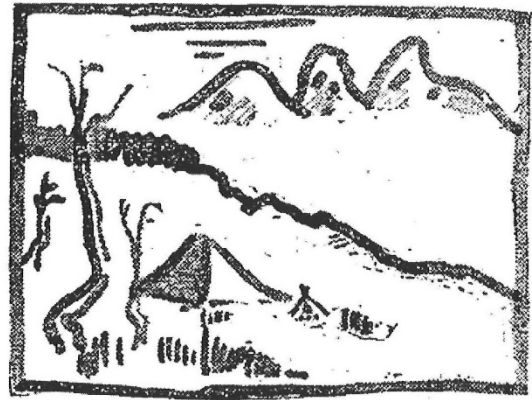


南會の神秘境を



途上点描

文 小 林 金 次 郎

湯の上より田島まで

第一信 七月二十三日
午前七時四十分。金津温泉を
振り出しに、南會探訪の愉快な
旅のさいころはふられた。
『湯ノ上温泉』へ向けて日光街
道をひた走る自動車は、この昔
白羽の矢が降つたと云ふ『天矢

』の里を過ぎて谷の急峻へ入る
幾丈の谷間を越ふこと約五十分
の牧、小谷の閉温泉を通過流
の下に見て又谷の底へ入る。
□
道の左手高く一列に連なる堤は
『上三寄』より田島町へ通ずる鐵

此處より南へ
『金鐘峠』を越
えて約二十町、有名な塔のへつ
りに着く縣道を左に折れて約五
町をばの白き花、人蔘の赤き花
標草の寄き郊の小路を過ぎて、
くぬぎ林に入ると額の音が樹立

を分けて聴えて来る、奇怪怪石
の絶壁には垂れ崖岩隙間などが
群り、十丈からの底に着き大川
の白波が渦を巻いて流れとある
兩岸の間には『熊見橋』といふ
危げな釣橋が懸けられてあり、

手前の岩上には新しい『あづま
や』がある、やがてこゝを尋ね
る人はこの橋木の上に『熊島民
報南會津探訪班』と黒々と書
かれてあるのを発見するであら



道の基礎工事であるが、今はし
ばらく其の工事を中止してある
路は益々清冽なる溪流を眼下
に、急カーブを上り下りする、
今谷へ突き落ちるか、今崖へ突
き落ちるかと思へば、夏の陽ざ
りながら、じは、と冷たい汗が腋
の下に流れる、ドライブ気分一
〇〇パーセントながら興味悪い
ことは九〇パーセントを遙かに
越えてゐる
□
八時五十五分『湯ノ上』へ着
く。
湯は川岸から湧いて氾濫、猿
の湯、釜の湯、舟の湯などがあ
る。『胃腸、肺病は言ふに及ば
ず脚氣、下痢、性病にも特效あ
り』といふからこの地方へ旅す

る人は前寄つて見るのも一興で
あらう。
この地方には興味ある傳説風
俗があるのでこれは概を改めて
筆をとることにする。
只一つ書きとめて置きたいの
は、この湯の上、南五町ばかり
の所に『地獄穴』といふ場所のあ
る事だ。入口は一町ばかり、案
内記によると『試みに石を投ず
れども遂ぞその石の音をきかず
』とある。地獄の奥にまで通
ずる人俗にいれる底なしの穴
だ。
湯の上小学校を訪問する。玉
川國太郎校長は多忙な時間を割

いて私たちのた
めにいろいろと
便宜を與へて呉
れた、心から感
謝しつつ學校の
現状をきく、こ
の學校は小さな學
校だがなかなか
設備するに足る
多くの事務を持
つてゐる。現に
校庭に設けられ
てあるコンクリ
ートの立派な奉
安庫の如きも、
見當差の一錢二
錢と積んだ貯金
によつて完成し
たものだといふ
玉川校長の徳育
の然らしめる所
と大いに感心し
た。

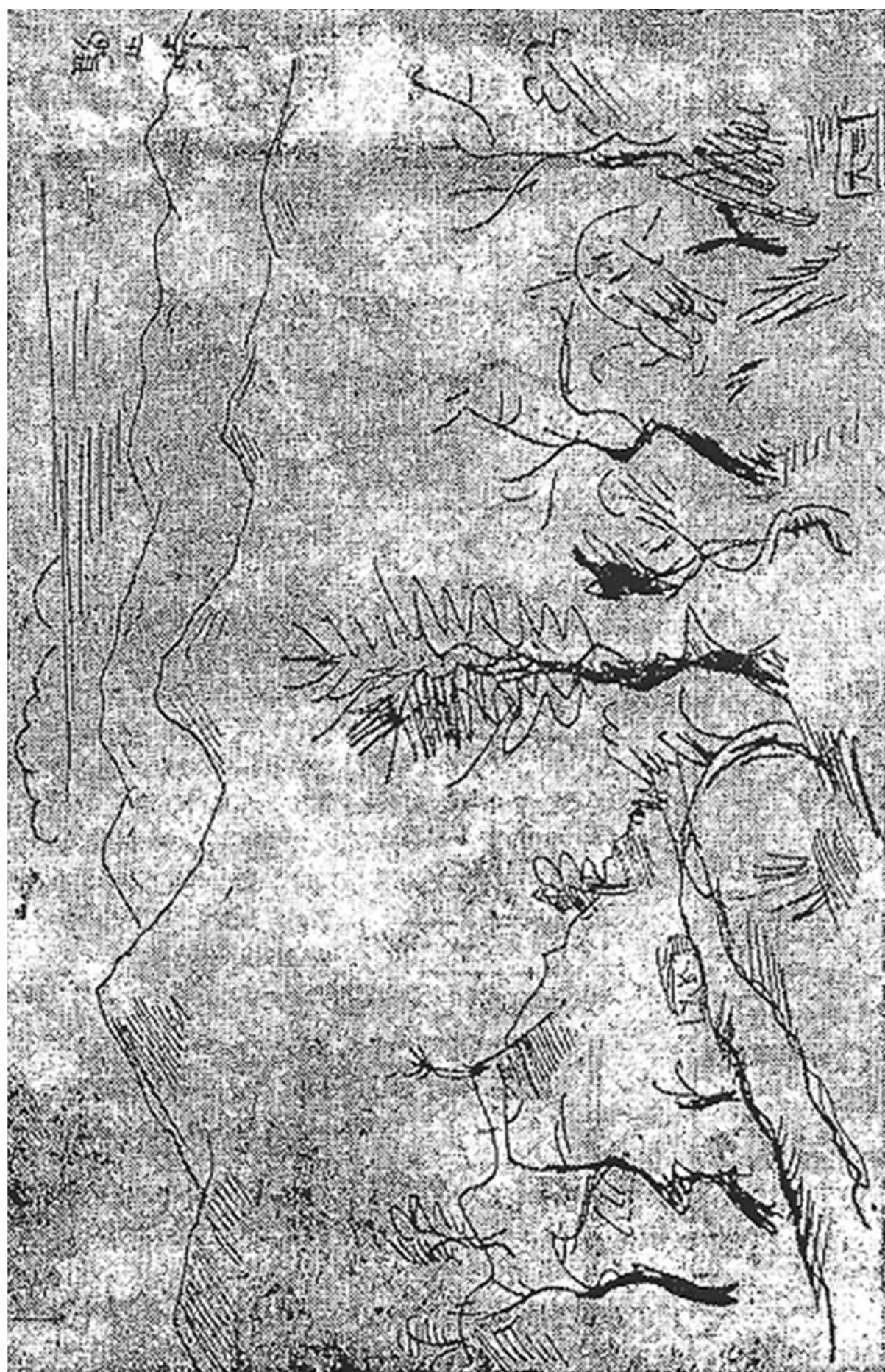
湯の上近し



熊田大三

2の描点の上途
りつへの塔
る探を境秘神の會南
番三 大田 熊





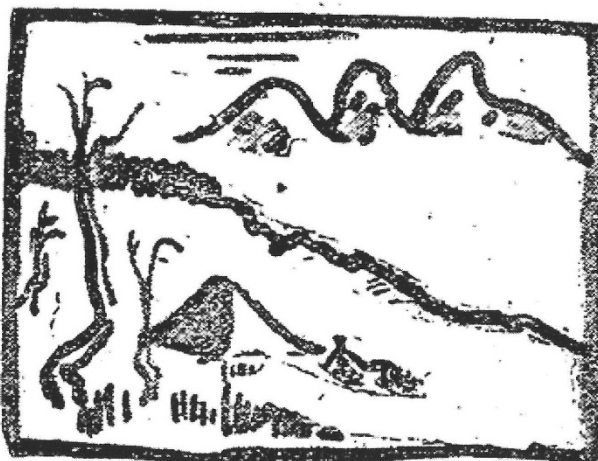
3の描點の上途「駒止峠」の會神の境を探る南會
熊田大三

中山峠より湯の花へ

靜かなる田島町の一夜は明け
放たれる。

早朝、縣下臨一と稱される植
物研究家星大吉先生が宿へお越
しになり、最近に於ける氏及び

牧野博士の研究になる平家の落人村と傳へられてゐる「一枝紅梅」の話、厚積の自然植物、動物に關する有益な語を私達にして下さる。



南會の神秘境を

る探

途上點描

郎次金林小文

中山峠へ向ふに就いて、
で自動車飛ばす。この地方「
荒瀬村」は約一萬町歩に餘る村
有の森林があり、村ではこれを
鑑伐して將來の無税村を計畫し
てゐる。

峠の茶屋まで約四里。一時間ばかりの間、田島町南會政友會の快徳猪俣清洲氏に送られる猪俣氏は二三日東京から注政方面の講義を了へて歸郷された許り、自分で自分の演説をレコードに吹込んで持つて居る。

峠の茶屋を出る。この近くに赤川の清流があり大滝、鐵瀨等の小滝がある。それを左に見下して「三瀨橋」を渡る。これよりいよ／＼上下四里の中山峠にかゝるのである。上り口に水で掛く古風な米掛き小屋があつてその掛く音がギツコンバツタンと寂しく森にこだまする。

中山峠は頂上まで約二里、路はゆるやかで驟止の急峻に比してまことに昇り良い峠である。最近この峠に自動車を通ずる車

が計畫され村民は村長も大いに
努力して居り、最近福島縣知事
も來遊してこれを認めたといふ



した人は今まで三人ある。その
密矢は入田宗吉代護士で次で川
崎監知事、淺見土木課長である

爰（こゝ）に燭（しほ）はけ峠（とうげ）の頂上（しやうじやう）で一息（ひとやすみ）
 れて又（また）雨中（うみぢゆう）を八郷（はちかう）に下る（くだ）る時に午
 後（ご）三時（さんじ）。

この村（むら）の路（みち）には「けやき」の
 太（お）樹（き）の阴（かげ）が幾（いく）つもくさみ散（ち）
 である。こゝより二里（にり）も、溪（たに）の花
 の里（さと）に入る。

この村の貴族公民學校には青柳英吉君といふ快男兒があり二百余人の生徒を相手に奉仕の生活をしてゐる。村長星啓三氏の出迎へを受け黄昏の路を行けば穴澤山の上に月がぼつかりと浮び上る。

先づ、村の元老星與左衛門氏に敬意を表し湯の宿海龍館に着く。星村長の私たちに對する待遇はまことに至れり盡せりで山椒の珍珠は次から次と運ばれる。岩魚の天ぷら、木くらげ、それに初茸、霜——。都賀人は龍がごちそうだと云ふと笑ふか

も知れないが、この山中では鶏
のこらさうは都會に於ける「七
面鳥」に似する。既待に話終
ず、床に就いたは十二時。雨音
かと怪しむ水の音の中にいつか
眠りに誘はれてゆく。

中山峠にて 齋熊田 大三

から寢現も遅い日ではなからう
現在迄にこの餘を自動車で征服

匠に聞いてゐるく、この邊りは
山又山、すべて大森林に被はれ

かと怪しむ水の音の中にいつか
眠りに誘はれてゆく。